

俳句通信

特別作品25句 藤本美和子「自在鉤」

特集 〈わが俳句、先の一步をどうするか〉

「虚子の無意味」

坊城俊樹

「美的虚無(京極杞陽再読)」 田丸千種

「夏の芝浜」

岸本尚毅

「勝手に一步」

三宅やよい

「前を向いて」

武藤紀子

「次の私に会うために」

森須 蘭

「第三句集を視野に」

前北かおる

「世界よ吾に触れてみよ」

坪内稔典

「同時代ということ」

横澤放川

「同化の思想——虚子像の深化へ」

西池冬扇

「『現在』に『書く』ために」

林 桂

「偶然を必然に」

鳥井真里子

「言葉で飾らない」

神田ひろみ

【新作30句】

山崎千枝子「師との距離」

【3人競詠20句】

船越淑子「マラッカ海峡」

高橋さえ子「砧」

好井由江「雲は秋」



●作品● 伊藤敬子・星野恒彦・秦 夕美・染谷秀雄・
関 成美・関森勝夫・山田貴世・江中真弓・
藝目良雨・檜山哲彦・小暮陶句郎 他



書齋にて

辻村
麻乃

夕紅葉水脈しんしんと尽くるなし

栗生純夫

紅葉

釣りは「フナに始まり、フナに終わる」と言われるが、「ヘラブナに始まり、ヘラブナに終わる」と言う人もいる。

ヘラブナ釣りは養殖魚を放流した、いわゆる管理釣りの場と、河川湖沼等で自然繁殖したヘラブナを釣る野釣りとは通じがある。主に管理釣り場の釣り人に腕自慢の人が多い様だ。

「釣り竿を肩にして出掛け、近くの小川でフナを釣り、後、多くの経験を経て、再びもとの小川に戻り自然に帰る」と私は思う。

ヘラブナ釣りの秋一番の楽しみは、紅葉の中の釣りだ。兵庫県の円山川の中洲から見ると対岸は急峻な山が立ち上がり、水面から頭上の視界いっぱいが紅葉で埋まる。

ヘラブナ釣りの浮子は紅葉と同じ赤、黄、緑の極彩色で、水面に映る紅葉に浮子は溶け消える。時折吹く風にざわめく波に一瞬見えるが浮子の役目は果たさない。無論釣りの技術も役に立たないが、何とか一、二尾は釣れる。釣るのでは無く、終日釣れるのを待つのだ。

これが釣りの極意かも知れない。



特別作品25句

自在鉤

藤本美和子

秋日傘畳めば近し黄泉のひと
日の表日の裏百日紅散つて
空蟬の草に吹かるる隠れ鬼
溪風に浮くはきつねのかみそりよ
みんなのこゑがまされる松の瘤
秋蟬のこゑにかこまれ瞑目す

特集

龍太、澄雄、兜太が去って、もしかしたらいまの俳句界は静かなものになっているのかもしれない。しかし、であるからこそ（あるいはそういう状況と関わりなく）自分の句の一步先のあるべき姿・かたち・方向性などを考えている（あるいは絶えず念頭にある句があって、その句の世界を目指そうとしている）作者もいるはずだ。（俳句、先の一步をどうするか）について、13人の俳人に聞いてみました。

へわが俳句、

先の

一歩

を

くかみゆりべ

新作30句

師との距離

山崎千枝子

切株が腰掛となる夏期講座
鷺草のサギとなるまで風の中
とうすみとんぼ川音は子守唄
軍港の一巡の間の昼寝かな
文をもて友を励ます夜の秋
終戦日平成終の詔
食べながら居眠る稚児秋うらら



前列右から 近氏、森氏、津高氏
後列右から 星野氏、藤本氏、丹羽氏

ゲスト 近 恵・津高里永子

丹羽真一・森 潮

ホスト 星野高士・藤本美和子

編集部 超結社句会第47回目です。ゲストは「炎環」同人の近恵さん、「小熊座」同人の津高里永子さん、「樹」代表、「樹氷」同人の丹羽真一さん、「杉」主宰の森潮さん、ホストは「玉藻」主宰の星野高士さん、「泉」主宰の藤本美和子さんです。遠慮のない意見交換をお願いします。

高士 すいぶん点が割れました。点の入らなかった句が少ないね。高句句からいきます。今日は4句句が2つ。まず、みちのくは銀山にして菊脛

●真高●

美和子 「みちのく」には「銀山」があつて、「菊脛」は「み

ちのく」ならではの食物で、無難なものがうまく17音の中に収まっています、いかにも、おいしそうだと思つて頂きました。

真一 「菊脛」が「みちのく」を代表する食べ物かどうか。

美和子 食べ物ですよ。

真一 そうですか。わたしは知らなかったんですが、この句で多分そうなんだろうなと思つて。「銀山」は銀山温泉以外にも、「みちのく」にはいくつあつて、「みちのく」の特徴をうまく捉えたかなと思ひました。それに少し深味のある感じを受けました。